

## ロウア・サウスの分離運動に関する一考察

——陰謀説の再評価を中心として——

### 富 所 隆 治

- 一、はしがき
- 二、陰謀説の史学史的展望
- 三、ロウア・サウスの分離運動
- 四、サウスカロライナの分離決定
- 五、ロウア・サウスの分離会議
- 六、あとがき

#### 一 はしがき

一八二〇年から南北戦争までの合衆国の政治史を特徴づけるものはセクショナリズムである。<sup>(1)</sup>この時期に合衆国は新たに拡大した北西部における穀物農業の発達、北東部における工業の急激な発展および南部における奴隷制プランテーション経済の顕著な発展をみたのである。小麦王国、工業王国として棉花王国はそれぞれの利害の対立とからみ合いのうちにセクションとして<sup>(2)</sup>の自覚を強めた。この間北西部と南部の経済的政治的紐帯

に代わって東西の提携が形成されていった。准州の獲得と移民の流入によって政治勢力を増大せる北部の東西提携は奴隷制度によってたつ南部と次第に対立の溝を深めた。一八二〇年代以降南部は次第に自覚せる少数者としての政治志向を示し、准州における奴隷制度の保証をもとめて益々攻撃的になり、合衆国政治における指導的影響力の保持に死活をかけてくるのである。<sup>(4)</sup>ここから“Southern Rights”(南部の諸権利)とか、“Equality within the Union”(ユニオン内の平等)が叫ばれ、それと憲法理論から正当化する“State Rights”(州権)を楯に“Independence outside the Union”(ユニオンからの独立)が主張される論理が形成されていった。<sup>(5)</sup>分離主義者にとって分離は革命ではなく州主権の正当な行使であった。<sup>(6)</sup>この意味で分離はセクショナリズムの自己貫徹であり、南北戦争はその決着をなすものであったといえる。アンテ・ベラムの経済的政治的思维的構造を含むすべての対決が力によって解答されたので

ある。

ついで先ごろ、エール大学のC・V・ウッドワード教授は「比較による吟味」の中で、南北戦争の歴史の意義を奴隷制度の廃止と連邦制の内部における権力の再配分とに求める従来の見解を拡大し、眼を国内から国外に転じ、南北戦争が世界の歴史に与えた衝撃を高く評価したポッターの指摘を引用し、南北戦争は、第二に、一八一五年のウォーターローの戦い以後ほぼ四十年間、ヨーロッパにおいてナショナリズムに反対する方向で動いていた時代の流れを良し悪しは別として、ともかく一変させたこと、第二に、南北戦争はナショナリズムと自由主義とを結びつける結果をもたらしたが、この結合は、本来は決して必然的な成り行きではなかった、とのべている。<sup>(7)</sup>

今日世界的意義を評価される南北戦争は分離を基本的前提としている。従って、南北戦争の原因究明には、いわずその先行過程をなす分離の原因がまず問われなければならない。そのためには、セクショナリズムの形成・実態・分離への完結理由が究明されなくてはならない。この小論では一八五〇年の妥協後の時期に限定し、検討をすすめたいと思う。

分離を導いた原因について、これまでに利己的ないし邪悪な人間の陰謀とする悪魔理論、州権の擁護とみる憲法理論、奴隷制度の維持とみるフィリップスの見解、プランター経済の利益性とみるハッカーの見解、煽動による危機意識とみる修正主義者の見解など、ビールらの指摘をまづまでもなく、きわめて多彩なアプローチがみられる。<sup>(8)</sup>

### 二 陰謀説の史学的展望

R・A・ウイスターは一九六一年に著わした「ロウア・サウス」の分離<sup>(1)</sup>において従来の陰謀説について史学史的検討を加え、分離は陰謀によるものではなく、大多数の人々の確信せる運動として表現したものであると結論した。この結論の是非を論ずる前に彼の論稿によって陰謀説の史学史的展望を試みたい。

分離が南部の奴隷所有者や官吏の少数者の陰謀によるものであるとする説は戦争中のユニオニスト史家の一般的テーマであったが、このイメージはH・グリーンリーによって強化され、さらにJ・W・ドラッパ、H・ウイルソン、J・G・ニコレイやJ・A・ローガンらによって北部的信念として定着していった。

一九世紀末には科学的かつナショナリスティックな歴史が描かれ、奴隷制度を分離の基本的原因と確信する共通の立場が生れたが、陰謀説の問題をめぐって、見解は分れた。H・ホン・ホルストは、分離主義者は南部人の少数者にすぎなかったが、トリックと偽瞞によってユニオンの破壊に成功した、と主張した。他方、J・F・ローズは分離を南部民衆の一般的運動として捉えた。<sup>(2)</sup>

陰謀説否定の立場は分離運動の古典的著作を遺したD・L・ダモンドやC・イートン、E・M・クルターを含む二十世紀の学者の間に広汎な支持を得ている。イートンは、一九五四年刊行の『南部聯邦史』のなかで、ユニオンを去ろうとする民衆

分離の原因と関連して、分離運動が少数者の運動であったか、それとも多数者の一般的運動であったか、またその間に分離主義者による陰謀的要素は介在しなかったか、さらに政治指導層による強行の色合いはみられなかったか、という問題が検討をねなければならぬ。本稿はロウア・サウスを対象に如上の基本的問題の一端を明らかにしてみた。

- (1) C. Eaton, *A History of the Old South*, p. 323
- (2) H. U. Faulkner, *American Economic History*, Chap. 16: *Economic Causes of the Civil War*.
- (3) Cf. J. T. Carpenter, *South as a Conscious Minority*, 1739-1861.

- (4) C. G. Sellers, Jr., *Comment on Why The Southern States Seceded*, in *The Crisis of The Union* (1965)
- (5) G. W. Brown, "Trends Toward The Formation of A Southern Confederacy" *The Journal of Negro History*, Vol. 18 (1933) p. 256
- (6) R. G. Gettel, *History of American Political Thought*, (1923)
- (7) 「日米マオラーラム」一九六九年七月号参照

- (8) H. K. Beal, *What Historians Have Said About the Civil War* (1946)
- なほ、史学史については拙稿「分離運動研究の前提」(「史苑」二一の一)参照。

の渴望はリンカン当選に続く二ヶ月に急速に成長した。こうした状況は少数者の陰謀ではなく、合理的な妥協を獲得できなかった感情によるものであった、とのべている。A・O・クレイヴンもまた攻撃的指導者が南部人をあやつって分離させたという考え方を否定した。『南部ナショナリズムの成長』のなかで彼は、分離のために早くから活動していた政治家がいたとはいえず、一八五〇年代における事件の圧力が南部人の大多数をして唯一の脱却の途として分離をうけいれさせるにいたる、まさにその時点まで、彼らが指導しなかったことを強調している。<sup>(5)</sup> ロウア・サウスの個々の州を扱った最近の特殊研究はみな陰謀説の否定か、無視の立場にたっている。<sup>(6)</sup>

こうした趨勢に対して、A・ネピンスは「ユニオンのための闘い」において陰謀説をのべ、注意深く計画された陰謀をめぐらした指導者の一グループがまず民主党を分裂させるための処置をし、リンカンの当選を確実にし、次いでリンカンの当選を南部の分離を促進するための手段として利用したと主張している。ネピンスの説は、陰謀指導者が少数者ではなく大きな民衆の支持をうけたと指摘している点で初期の陰謀説といささか趣を異にしている。<sup>(7)</sup>

これに対してR・F・ニコラスはネピンスの前掲書を批判して、盟邦を樹立しようとする南部の指導者の側でのいかなる計画も一八六〇年の夏の民主党大会の決裂までは発展していなかったことを指摘し、党を分裂させようとする企ては盟邦を樹立することよりもむしろダグラスを破って上院議員当選人J・レ

インを候補にたてることにあつた、とのべ、さらにこれら指導者が政治家ではなく政治屋であること、それ故に長い見通しと徹底した計画よりもかけ引きだけで切りぬけていく点に一層の注目を与えるべきことを説いている。<sup>(8)</sup>

ニコラスは、分離の行動をもとめる感情が奴隷所有者や政治指導者よりも解放奴隷との経済的社会的斗争からもっとも苦しむと考えられた階層である南部の貧しい非奴隷所有者の間においてもっとも強力であつたと主張している。<sup>(9)</sup> ウィスターはこれを取りあげ、もしもニコラスが主張する如く非奴隷所有者グループの間で分離支持がもっとも強力であつたのなら、陰謀説は妥当なものではないと、きめつけている。<sup>(10)</sup>

ところが、南部セクションナリズムの経済的基礎を研究したR・R・ラッセル、サウスカロライナを研究したD・D・ウォレスやH・S・シュルト、またヴァージニアの研究をしたJ・C・ジッターソンは総人口に対する奴隷人口の比率の高いプランテーション地域に一般にロウカウンツリにおいて分離主義が、よく、逆に奴隷人口の比率の低い農地地域に一般にアップカウンツリにおいてユニオニズムの強い傾向を確認している。<sup>(11)</sup>

それにも拘らず、U・B・フライリップスの記述するように、多くの非奴隷所有者の熱心な分離主義や盟邦軍隊における幾干人も熱心な従軍がみられたこともまた事実である。<sup>(12)</sup>

この点について、フライリップスは多様性をもつ南部の統合力を白人の地域としてとどまらうとした南部の決意に見出し、これを南部史の中心テーマとよび、奴隷制度は単に労働の支配

とは言い難い。のみならず、州内での進歩的改革から人々の注意をそらせるために奴隷制度をめぐる国の政治問題を斗わせた<sup>(16)</sup> というB・F・ペリーの如き、鋭い批判に直面したのである<sup>(17)</sup>。

C・S・ブーチャーは一九二二年の論文において早くも南部の統一性の欠如を指摘し、さらにこの中で、一八二二年後まもなく力を将来の可能性を自覚した攻撃的奴隷制社会がミズーリ協定以下の方策によって漸次国家の支配権を得、棉花王国に世界の残存の運命を担わせ、奴隷制度を礎石とする完全な社会を樹立せんとしたという通説を真向から批判し、南部はいかなる問題でも統一できなかつたし、統一する手がかりをもたなかつた政治過程を詳細に論じ、大統領選挙においても南部の保守票が驚くほど大きく、ブリッキングリッチの票を攻撃的政策に結束した人々の勢力の指標と見做しても南部人の四五%を構成したにすぎなかつたばかりでなく、加えて南部の選挙が分離を争点として行なわれたものでないこと、しかも強力なユニオン感情が存在したことを強調した。<sup>(18)</sup>

その後、南部の統一性の欠如についてブーチャーの立場を認めつつも、D・C・タレンショウは、攻撃的陰謀者の存在を無視してはならないと警告し、一八五九一六〇年までに南部には決意せる憤激グループが存在していたことを指摘し、陰謀説の再評価をせよ<sup>(19)</sup>と述べた。

(117) 陰謀説をうたひてはいないが、D・M・ポッターは『分離の危機におけるリンカンと彼の政党』において、アッパーサウ

のみならず、人種調整と社会秩序のシスラムとして樹立されたものであるが故に、それが攻撃されたとき、単に投機的利益としてではなく白人優越主義と白人文明の保証として強力に情熱をもって擁護されるに至つたのであると説明している。さらに彼は南部の白人社会は鋭い階級的亀裂を示していたのではなく、奴隷制度の擁護に関して統一された社会であつたと見ている。<sup>(13)</sup>

南部盟邦がアッパーサウスを包括したところからフライリップスの見解は一見妥当なもののように考えられるが、何故にアッパーサウスにおいて即時分離がユニオニストや協同主義者によって阻止されサマター要塞攻撃後にもち越されたのであるか、また何故にリンカン当選の時点において人種問題の決着に断が下されたのか充分説明できないのである。むしろ我々は人種問題が南部内部の分裂ないし相剋を克服し、内部結束を計るための手段として利用されているのを看過してはならないのである。R・N・カレントの言葉を借れば、南部史の中心テーマは白人優越主義の維持ではない。それは若干の白人の優越の維持である。そしてこの目的のための手段として一般的白人優越主義の虚構がきわめて大切なのである。<sup>(14)</sup>

この設定を現実政治に適用せんとしたのがカルフーンであつた。彼はプランターという少数グループの利益を全南部人の利益とし、少数者の権利を南部の権利にすりかえ、ニグロの存在を黒人と一緒にいる白人を説得する鍵となし、ソリッド・サウスの最初の設計を企てた。<sup>(15)</sup>

しかしこの設定にもとづくカルフーンの努力が成功を収めた

のみならず、ロウア・サウスにおいても分離はひとしく民衆の歓迎せるものではなかつたとのべ、即時分離に反対する勢力はサウスカロライナを除く各州の選挙において少なくとも四二%を獲得したが、いずれの場合でも分離主義者は大統領選挙に際して投ぜられた票の大多数を構成するに足るだけの票を確保できなかった事実を指摘し、最近の通説を否定し去つてゐる。<sup>(16)</sup>

以下、分離運動は真に民衆の一般的運動であつたのか、また分離強行派による陰謀的要素は介入していなかつたのか、分離運動を促進せしめた契機は何であつたのか、この三点に注目しながら政治指導層の分離に対する態度を中心にロウア・サウスの分離運動を考察してみよう。

註(1) Wooster, "The Secession of The Lower South: An Examination of Changing Interpretations," *Civil War History*, Vol. VIII, (1961)  
(2) *Ibid.*, pp. 117-19.  
ロースはデヴィンス、トームズをしてペンシヤミンら南

部指導者の高貴人格をのべ、Ch. C. W. Ramsdell, "Changing Interpretation of the Civil War", *the Journal of Southern History*, III (1937)

(3) 拙稿「前掲論文」参照。

(4) Eaton, *A History of Southern Confederacy*, (1945) p. 15

(5) Craven, *The Growth of Southern Nationalism*, 1848-1861, (1953) pp. 399-400.

- (9) C. E. Cauthen, *South Carolina Goes to War, 1860-1865* (1950), p. 32 以下. "S. C. Goes" 著者 C. L. Rainwater, *Mississippi: Storm Center of Secession, 1850-1861* (1938), p. 218.
- C. P. Denman, *The Secession Movement in Alabama* (1933), p. 122.
- Dorothy Dodd, "The Secession Movement in Florida, 1850-1861," *Florida Historical Quarterly*, pt. 1, XII (1933), p. 65
- Willie M. Caskey, *Secession and Restoration of Louisiana* (1938), p. 35.
- (7) News, *The War for the Union* (1959-60), p. 1, 10.
- (8) Nichols' review in *American Historical Review*, LXV (1960) pp. 627-29.
- (9) Nichols, *The Disruption of American Democracy* (1948), pp. 415-16.
- (10) Wooster, *op. cit.*, p. 122.
- (11) Russell, *Economic Aspect of Southern Sectionalism* (1924). Wallace, *South Carolina: A Short History, 1820-1948*, (1951). Schulz, *Nationalism and Secession in South Carolina, 1852-1860* (1959). Stiterson, *The Secession Movement in North Carolina* (1939).
- (12) Phillips, *The Course of South to Secession*, pp. 152-53.

サウスカロライナの政治指導層は南部諸州との結束を第一の政治課題としたが、過激主義の懸念によってリーダーシップをとることを阻止されていた。<sup>(3)</sup> 民主党組織の有効性を信じていたオアアは國政参加運動のイニシアチブをとり、一八五六年には民主党大会への州代表団の派遣を実現した。<sup>(4)</sup>

この間一八五四年にはカンザス・ネブラスカ法案が提出されて、南北の対立は新局面を迎えた。ローズは合衆國憲法制定後連邦議會を通過した法案中もつとも重要なものはカンザス・ネブラスカ法案であったとのべているが、それは弱体化せるウィングに最後の一撃を加え、奴隷制問題をめぐる政党間の一大再編成のプロセスを結果した。北部における共和党の結成にひきかえ、南部では一大政党制が崩壊し、以後民主党が支配的となるのである。<sup>(6)</sup>

分離主義は、一八五六年の大統領選挙を契機として再びよび起され、翌五七年の恐慌によって急速に浸透するに至った。一八五六年の大統領選挙の前夜すでに多くの民主党員はフレントが当選した場合には分離すると述べたといわれる。選挙の結果はブカナン<sup>(7)</sup>の勝利に帰したが、民主党指導者に政権失墜の近いことを悟らせたことは間違いない。デヴィスは<sup>(8)</sup>ブカナンの当選を以後四年間の休戦を与えたとすぎないとのべた。選挙一ヶ月後にサヴァンナで開かれた南部商業會議はまさしく反連邦感情が大きく成長したことを示し、以後會議は分離主義者の会合に転じた。一八五六年の大統領選挙を契機に棉花諸州の新聞は分離を鼓吹する糸口をつかんだのである。<sup>(10)</sup> 同時に、政府の支配を

- (13) *Ibid.*, p. 152, 155.
- (14) Current, "John C. Calhoun, Philosopher of Reaction," *The Antioch Review*, (1943), pp. 223-24.
- (15) *Ibid.*, p. 223.
- (16) Eaton, "Old South," p. 338.
- (17) Boucher, "In Re That Aggressive Slavery," *Mississippi Valley Historical Review*, Vol. VIII, Nos. 1-2.
- (8) Oenshaw, *The Slave States in The Presidential Election of 1860* (1945)
- (9) Potter, *Lincoln and His Party in the Secession Crisis* (1942), p. 214.

### 三 ロウプ・サウスにおける分離運動

クレーの妥協案を拒絶して、分離のプログラムを成功させたかに見えたサウスカロライナの分離強行派は、州内ではユニオニストを包括せるメンガー、チープス、オアア、パトラーおよびハルンウーホルの協同主義者の反対により、またアラバマ、ミシシッピ、ジョージアにおける分離主義者の敗北とヘーシニアの助言により挫折を余儀なくされた。ビジネスマンの平和と称される一八五〇年の妥協に対して分離強行派は南部の結束をつかめなかつたのである。<sup>(1)</sup> 以後レットは支持者を失ったばかりでなく民衆に深い不信感を与えた。新たな分離のための運動が起らない限り、レットに対する民衆の評価を変えられなかつた。<sup>(2)</sup>

続けるための保証手段として政党勢力の推移が南部の指導者達によって検討された。ピアースの任期の終る前二月六日付のナチェズ・フリー・トレイダー紙は、一八六〇年の大統領選挙の前にブラック・リベブリカンの組織が北部民主党の大部分を吸収するものとみられる故、逆の組織をつくるのが南部民主党の政策になると報じた。三月二日付の同紙は、北部民主党の不安定な性格を指摘し、民主党はそれが南部の諸権利を主張し続ける限りナショナルな性格をとどめるものであるとの認識にたち、<sup>(11)</sup> "南部の多数者か、それとも北部の少数者が民主党を支配すべきなのか"と二者択一をせまり、北部派を党内につなぐための妥協に反対した。<sup>(12)</sup>

一八五七年の夏、リッチモンド・エンクワイアラ紙はチャールストン・マーキュリー紙を"年百年中ユニオンの一刻もすみやかな解体以外に何ものべていない"と非難したが、同年七月一四日付ミシシッピ・フリー・トレイダー紙も、和解の日は去つたとのべ、一八六〇年の選挙が終つたとき、そこには勝者と敗者がのこされるだけであると警告した。<sup>(14)</sup>

分離主義の抬頭に拍頭を加えたのがカンザス問題であった。レコンプトン憲法において人民主権の教理が否定されているのをみたダグラスはブカナン政府と手を切つたが、カンザス問題が処理されない中に起つた一八五七年の恐慌はそれが実際に与えた打撃よりも二つのセクション間の政治的紐帯をそこねる結果をもたらした。<sup>(16)</sup> 同年のドレッド・スコット判決と相俟つて南北デモクラットの対立を顕在化し、同時に南部における分離勢力

の急速な成長を促したのである。シュルツの評価によれば、ユニオン内では南部の安全はないとの確信をいだくにいたった勢力はサウスカロライナ州議会において一八五七年より増加の一端を辿り、五九年末までにその勢力は三分の一から過半数を制するようになった。<sup>(17)</sup>一八五八年のギスト知事の当選はサウスカロライナを民主党につなぐことを拒んだ分離強行派の勝利であった。<sup>(18)</sup>同年九月に同州の政治指導者の一人M・L・ボンハムは「その（共和党員の当選）報道を伝える電気のスペースはこの連合国家の静かな死のシグナルとなるにちがいないし、なるだろう。その時はかならずやってくる」と六〇年の破局を確信していた。

南部商業会議を分離のための予備会議として煽動していたヤンシーは、一八五八年J・S・スローターの南部州権党による救済の構想を批判して、南部の救済は南部人の巧みな組織化にあると主張し、それによって分離感情の昂揚と統一行動による革命への突入の途がひらかれると説き、全棉花州における保安委員会の組織をよびかけた。彼は大胆にも「ユニオンは死滅している」とのべた。<sup>(20)</sup>統一南部人同盟の組織をつくるためアラバマの南部を旅行したヤンシーは当地ベセル教会において、人々に党と政府の両方の拘束を打ち切るとききたとのべ、南部盟邦に向って独立するようよびかけた。<sup>(22)</sup>

当時マシシッドの民主党員は北部派の理解をめぐって二つの見解に分れていた。一つの立場は上院議員のA・G・ブラウンに代表された。彼はハベルフルストの演説において、北部と南

部の間に深刻かつ和解し難い相違のあることを認め、それ故に「ナショナル・デモクラチック・パーティーを葬ること」を望んでいた。他の立場はデヴィスによって代表された。彼はニューイングランドの演説において、ナショナルな進路を説き、北部派の支持をもとめた。デヴィスのコースは一八六〇年の選挙において勝利を獲得する必要性から導かれていた。デヴィスの指導の下に一八五八年の州民民主党はナショナルな性格の維持にとめることをきめたが、それは南部の諸権利の犠牲なしにはなされないという矛盾をもっていた。<sup>(23)</sup>マシシッドの元知事J・マッシュウスは一八五八年二月の公開演説において、州民に対して合衆国憲法およびユニオン、それに南部の諸権利のために同胞が一体となって闘うように訴え、シンシナティ綱領を固執せる北部人のすべてを友好的に心から歓迎することの重要性を強調した。このように民主党によるユニオンの支配と同時に南部の諸権利の保証の可能性がなお一群の政治家によって期待されていたのである。

しかし、この間状況は刻々と変化していた。フリーポートにおける第二回ダグラス・リリンカン論争において、ドレッド・スコット判決の是非を問われたダグラスは、南部の支持を失うことを恐れてトニーの見解を拒否できず、また人民主権を信奉するイリノイの選挙民の支持を失うことを恐れてそれを否定できず、准州の人民は合法的方法によって州憲法の制定前にその境界内から奴隷制度を排除できるとの見解をのべた。<sup>(25)</sup>

しかし、南部民主党員はフリーポート・ドクトリンとよばれ

るダグラスの教理を北部の共和党の立場を承認するものと見做し、奴隷制度の維持に致命的であると見たがために妥協の余地のない対立に発展した。<sup>(26)</sup>まさに、R・G・ゲッチェルの指摘する

如く、この問題をめぐる民主党の分裂は西セクション間の政党的紐帯の最後の絆をたち切ってしまうのである。<sup>(27)</sup>ここに至って、デヴィスも態度を転じマシシッドがダグラスを支持しない旨をのべ、フリーポート・ドクトリンは合衆国の法律にとつて攻撃的であり、セクションの平和にとつて破壊的であると非難した。<sup>(28)</sup>

一八五九年のはじめ上院において、ダグラスはA・G・ブラウンの議会による奴隷制度の保護立法の要求に対して、それを准州における人民の権利の侵害ときめつけ、「准州の人民の意志に反して奴隷制を強制することが連邦政府の義務だ」という綱領をかかげ、民主党の大統領候補が北部の民主党支持州のたゞの一つでも味方になることができようとはとうてい思えない」と批判した。たしかに、フリーポート・ドクトリンは一八五八年の選挙でダグラスを救ったのである。この年の選挙はイリノイ以外では民主党に不利で、共和党はオハイオ、インディアナ、ミシガンそしてアイオワの西部諸州を獲得した。<sup>(30)</sup>フリーポート・ドクトリンが民主党の分裂を決定しリンカンの当選を導いたとみるなら、南北戦争は西部に発祥し、西部をめぐる闘いであったと評することができよう。<sup>(31)</sup>

デヴィスはダグラスとの二年間にわたる上院での論争を通じて党の支配が得られなければ党を破壊してもやむを得ないとの

考えを固くし、レット、ヤンシー、トウームズおよびJ・P・ベンジャミンらと軌を一にした。<sup>(32)</sup>

一八五九年一〇月のジョン・ブラウン事件はダモンドが記述するように、分離感情を昂揚し、結晶化するものであった。<sup>(33)</sup>サウスカロライナでは自警団を組織するための大衆集会がひらかれた。<sup>(34)</sup>ギスト知事は一月二十九日の教書において、ユニオン内の解決の不可能性と共和党大統領選出の際の分離をのべ、他の南部諸州の協同をうるためのあらゆる手段を使うように訴え、事件をルピコン川の渡河になぞらえて、南部の結束を促した。<sup>(35)</sup>

しかし州議会は分離を明示した奴隷州の会議を召集する決議案を成立させることができず、単に統一的行動を協議するため奴隷州の議会を召集する決議案を通じた。この決議にもとずいて州議会は、奴隷州の知事に代表者の指名と会議促進のための適切な方策を依頼し、バージニアに同情を送り共同防衛に結束するよう要請するためにメミンガーを特使として派遣し、臨時軍事費一〇カドルを支出することを承認した。<sup>(36)</sup>

バージニア州議会に赴いたメミンガーは、一月十九日、ユニオンは「より完全なユニオンたることをやめた。従って正義をうちたてることなく国内の平和は保証できない」と論じたが、これより先、一月十七日には、一八五〇年の妥協はサウスカロライナがバージニアの忠告に従うことによって実現したが、結局それが南部の諸権利を確保できなかった以上は、サウスカロライナのプログラムがリードする新しい運動の必要なことを説いた。この中でメミンガーは提案された会議の目的について、

ユニオン内の南部の利益を保護することであり、分離の阻止にあると明言していたのである。<sup>(37)</sup>

これにこたえて、バージニア州議会は、一六の北部州が南部の制度に反対する陰謀に結束していると非難し、民兵の増加を勧告し、北部との通商断絶を示唆する決議文を採択したが、肝心な奴隷州の会議を拒絶してしまった。

バージニアが会議を拒絶するや、ミンシッピもまたスタークを派遣して説得を試みた。<sup>(38)</sup>しかしバージニアの再度の拒絶によって会議の計画は挫折した。

会議の失敗理由について、ダモンドは会議の目的がユニオンの維持にあったにもかかわらず、分離の懸念によるものであった、とのべているが、実際には、この会議は南部がユニオンに留まる条件として南部の諸権利を保証する合衆国憲法の修正をもとめるというハートフォード会議の流れに従っていたとはいえず、提唱者は内心この方法による成功をはじめから殆んど期待していなかったものであり、会議の手続きで奴隷州を結束させ、一まとめにして分離させ、新政府を樹立することを目論んでいたのである。<sup>(39)</sup>

この拒絶はメミンガーや他のサウスカロライナ人に打撃を与えたが、そのうちのあるものは事態を分析して、サウスカロライナは個別州行動によって南部を危機に陥し入れ、決っているバージニアや他の諸州を南部盟邦に引きずり込むための先鞭をつけることを余儀なくされたと結論した。<sup>(40)</sup>チャールストン・マキーニ紙はバージニアの拒絶は棉花諸州が分離運動におけ

つたといわれるが、奴隷諸州において分離に踏切るに充分な世論の形成がなかったのである。

サウスカロライナの出版物は一八五九一六〇年三月にかけて北部との密交を煽動したが、この間分離強行派は、アラバマおよび連邦上院において民主党への綱領要求という方法で南部を結束させようとした。<sup>(46)</sup>前者のアラバマ綱領と後者のデヴィス決議案とはこの目的の達成をはかるものであった。アラバマ綱領は、准州における奴隷制度の保護のための議会の奴隷法と奴隷制擁護の信条をうけ入れる候補者の指名を骨子としていた。アラバマ州議会は民主党大会がアラバマ綱領の採択を拒否した場合には代表団に大会から退場するべき旨の訓令を与え、共和党の大統領選出に際して特別会議の召集をきめた。ミンシッピはアラバマ綱領を支持し、南部会議をもとめるサウスカロライナの提案に同意し、アトランタを開催地に指定した。サウスカロライナ、ルイジアナ、フロリダ、テキサス、アーカンソの諸州もまたアラバマ綱領を支持し、ヤンシーに従う用意をした。<sup>(47)</sup>分離強行派の士気はあがった。

他方、一八六〇年二月二日および三月一日にデヴィスが提出した上院決議案は、カルフーンの州権論を肯定し、連邦議会に対し、准州における奴隷制度の保護ならびに逃亡奴隷法の施行を要求し、連邦議会であっても、准州議会であっても直接、間接の立法によりいかなる市民からも奴隷財産を共有の准州に持込む憲法上の権利を奪うことはできないと主張して、フーパー・ドクトリンを真向から否定するものであった。過激分子

る主導権をとるべきことを知らせたと報じた。サウスカロライナの分離強行派にとってバージニアのリーダーシップは望ましいものではあったが、それよりもアラバマ、ミンシッピの支持を不可欠なものとしてみた。<sup>(41)</sup>

この間、若干の分離強行派は、衝撃的事件の生起によってのみ南部を行動に踏切らせることができると結論し、まず下院議長にヘルバーの信奉者で南部人の感情を爆発させることのできる人物とみられたジョン・シャーマンを選出する計画をたてた。ギスト知事は、W・P・マイルズに宛てた手紙の中で、それとなくブランを待ためかし、もしそのブランが行なわれるなら流血の革命が不可避となること、そして自分は不平等や没落に甘んずるよりはむしろ血による決済に従うつもりでいること、そして下院議員が行動を起せば休会中の州議会を召集し、州の分離を決定する用意のあることを書いている。D・H・ハミルトンはこのブランへの賛意と支持をのべた。しかし、シャーマンの選出に失敗し、ブランは葬られた。<sup>(42)</sup>

ミンシッピの下院議員で分離強行派のJ・A・クイットマンは分離運動のリーダーシップをとるようにもとめられた時、棉花栽培の中心であり、ブラックベルトの中心である湾岸諸州でさえ一緒に行動することを拒むだろうとのべ、<sup>(43)</sup>南部を覚醒する唯一の方法は、一州が分離することである」と説いた。<sup>(43)</sup>協同分離の見通しは暗いものであった。

ジョン・ブラウン事件に際して、サウスカロライナ州内ですら、チャールストンやバックカウンスリは冷静さを失なわな

はダグラスがこの決議案を呑むようにせよ、さもなければ南部の票を失うであろうと警告した。<sup>(48)</sup>明確に南部の主張を宣言したアラバマ綱領とデヴィス決議案とは分離強行派に活動の地盤を与えたのである。

レットは民主党を破壊し、ユニオンの解体のためにブラック・リパブリカンを選ばせるにはミンシッピ、アラバマおよびサウスカロライナで充分であるとのべた。<sup>(49)</sup>民主党破壊の戦略はレットからマイルズに宛てた手紙の中で述べられている。

私は南部における一般民衆に戦闘意欲がないと考えるのは間違っていると思う。……人々は勇敢かつ決定的コースを支持するにちがいない。南部人の勇敢さをそこねているのはワシントンにおける彼らの党派の接触である。南部は腐った北部の連中から手を切らなければいけない。チャールストン大会後我々は自分たちの原則にもとずいて組織された南部州権民主党と州権候補者をもたなければいけない。これらはいわゆる二つの顔をしたジョン・デモクラシーの破壊を保証しよう。<sup>(50)</sup>

他方、ヤンシーはアラバマにおいて党の支配権をにぎって民主党の破壊に向かうのであるが、レットに関する研究によれば、一八五九一六〇年のヤンシーとレットとの間の行動の一致はナショナル・デモクラチック・パーティーをうちこわすために准州問題をを用いることで形成されたことを明らかとしている。<sup>(51)</sup>

民主党大会の分裂について、ダモンドは南部民主党指導者の言動から彼らが民主党の分裂を不安の念でみていたことを指摘し、決裂は決して南部の少数分離強行派の陰謀によるものでは

なく、共和党諸州を勢力地盤とするダグラス派が大会冒頭に要求した議事ルールの採択、ダグラスの大統領への野心、ダグラス派の退場者の非難およびダグラスの妥協の拒絶を分裂の要因として数えた。それにも拘らず、大会二ヶ月前にレットによって考えられた構想が殆んどそのままに実現したのである。実際、レットは一八六〇年の選挙中に北部と南部のユニオニスト、殊にダグラス派民主黨員によって非難されるような言葉を与えていたのである。<sup>(53)</sup>

クレナウンは、南部は北部民主党を南部民主党の支配下におこうとしたチャールストン大会の「賭」に敗れたと結論しているが、レットは既にチャールストン大会を州権派が支配するチャンスのないことを認めていたのであって、決裂は予定のコースであり、人民主権（南部はこれをスコッター主権とよんだ）とドレッド・スコット判決の解釈を名分としてアラバマおよびミシシッピの代表団が退場する一幕は、民衆の決意を促し分離感情を昂めるための予定の見せ場にすぎなかった。<sup>(55)</sup>

四候補者は選挙戦に入ったが、ブリッキンリッチ派の指導者は彼らの候補者を選挙人団においても、下院においても大統領に選出しようとする確信をもつてはいなかった。早くもリンカン当選という悲観的観測が指導者の私信にひろがり、リンカン当選によって即時分離を正当化する主張がなされた。サウスカロライナのJ・D・アッシュモアは、「私は八月九日の演説において強い分離主義者の立場をとるのである。そして私が殆んど間違いないとみてゐるリンカンの当選の際には南部盟邦を提唱するこ

とを約束する。」と書いた。<sup>(57)</sup>

分離強行派はリンカンに対する不信を煽った。一八六〇年協会のパンフレットは、いかなる大統領にも信頼をおくことは無益であるとよびかけた。一〇月二三日付のジャックソン・セミウイークリー・ミシシッピアン紙は次のように煽った。「たとえリンカンが南部の権利を保障しようとも、たとえアフリカ奴隷制を含む南部のあらゆる権利を神聖なものとみることを厳粛に誓ったとしても、だれも彼を信じないであろう。」<sup>(59)</sup>

リンカン当選を確信せる分離強行派は戦闘準備に着手し、民衆を分離に引きずり込むための組織化に乗出した。ミニエネット・メン（民兵）は六〇年末ごろサウスカロライナにつくられ、ミシシッピをはじめ南部諸州に拡大した。この組織は、南部の利益を維持し、南部盟邦の樹立を援助することを目的とした軍事組織であった。一部の刊行物は、ミニエネット・メンを無責任かつ危険な組織と評したが、チャールストン・マーキュリー紙は、ミニエネット・メンの任務は戦闘と装備と訓練にあり、南部諸州の直面している凶悪な状態から起つてくるかも知れない不測の事態に備えることであると論じた。この組織に注目したニューヨーク・トリビューン紙は、南部に良識ある態度をとるよう訴えた。<sup>(61)</sup>

これと呼応して、奴隷制社会においてもっとも恐れられていたアポリシヨニストの教唆による奴隷叛乱がでっちあげられ、これを武器として南部の有権者をブリッキンリッチ派に送りこむ戦術がとられた。焼打ちとか毒殺という人々を戦慄させるお

そるべき話題が南部の出版物を満した。ケイトは、それらを南部の文明を完全に破壊しようとする北部の野蛮人の群れによる攻撃の前兆と評した。<sup>(62)</sup> 分離強行派は南部人の結束を計るための煽動的手段をつくした。しかし、煽動的手段による感情へのアピールもミニエネット・メンの組織も、選挙結果から判断すると決して結束せる南部をつくることに成功してはいなかった。<sup>(63)</sup> 夏がすぎ去るにつれリンカン当選の可能性がいよいよ濃厚となった。これとともに、ひとしく南部の支持をたのみとするメル、ダグラスおよびブリッキンリッチ間の争いも白熱化した。ダグラス派とメル派の人々はブリッキンリッチが選挙から当然退くべきであると主張した。これに挑戦して、ブリッキンリッチ派のナッシュビル・ユニオン・アンド・アメリカン紙は、彼に南部が結束すれば尚当選の可能性はあると反論し、<sup>(64)</sup> 南部の結束は同時に北部に対して我々の諸権利を守らうとする決意の程を示すであろうと論じた。<sup>(64)</sup>

同時に、リンカン当選の際の南部の対応策についての議論がおこった。トウームズ、レマテ、ヤンシー、デボーン、トウアー、クイットマンらは革命熱を煽っていたが、各州は別々に救済策を決めなければならなかった。諸州間に一致した方策が考えられていたのではなかった。<sup>(65)</sup>

(51) Schultz, *op. cit.*, chap. II, Wallace, *op. cit.*, pp. 311—16.

(52) Schultz, *op. cit.*, p. 14.

(53) *Ibid.*, pp. 19—20.

(4) *Ibid.*, pp. 22—23.

(5) Cf. J. F. Rhodes, *History of the United States from the Compromise of 1850.*

(6) Alexnader Heard, *A two-Party South ?* p. 8.

(7) Rainwater, *op. cit.*, pp. 37—38.

(8) *Ibid.*, p. 40.

(9) Russell, *op. cit.*, p. 179.

(10) 公然と分離を提唱せる新聞はサウスカロライナに限られなかった。

the Richmond Examiner, the Richmond South, the Columbus (Georgia) Corner Stone, the Mobile Register, the Mobile Mercury, the Montgomery and Gazette, the New Orleans Crescent, the New Orleans Delta, the Vicksburg True Southerner, the Memphis Appeal 432j°

(11) Rainwater, *op. cit.*, pp. 60—61.

(12) August 18.

(13) August 13.

(14) Rainwater, *op. cit.*, p. 44.

(15) Esseltine and Smiley, *The South in American History*, pp. 255—57.

(16) C. E. Cauthen, *Secession And Civil War in South Carolina*, Part I: Political, p. 20. Cf. "Secession And"

- (7) Schulz, *op. cit.*, p. viii.
- (8) *Ibid.*, p. 176.
- (9) Cauthen, "Secession And", p. 48.
- (10) Brown, *op. cit.*, p. 260.
- (11) League of the United Southerner の組織及び其の発展 (Dunmond, *op. cit.*, chap. II)
- (12) Brown, *op. cit.*, pp. 260—61.
- (13) Rainwater, *op. cit.*, pp. 61—63.
- (14) *Ibid.*, p. 64.
- (15) Hesselstine and Smiley, *op. cit.*, p. 259.
- (16) Dunmond, *op. cit.*, chap. I.
- (17) Gettell, *op. cit.*, p. 347.
- (18) Hesselstine and Smiley, *op. cit.*, p. 260.
- (19) トレン・ホムンズ、〈ヘンリー・ロマンチャー共著〉『歴史』「ヘンリー・ロマンチャー」上巻、二四九—四八頁、參照。
- (20) Hesselstine and Smiley, *op. cit.*, p. 259.
- (21) タムソの歴史及び其のリンカンの勝利は田舎農民の民衆的運動の果敢な表現と見做すことのできるものである (W. E. Dodd, "The Fight for the Northwest, 1860". *American Historical Review*, xvi. (1911). pp. 774—88.)
- (22) ホムンズ、ロマンチャー共著『新選集』二四九頁。
- (23) Dunmond, *op. cit.*, chap. II
- (24) Schulz, *op. cit.*, p. 189.
- (25) *Ibid.*, p. 192.
- (26) *Ibid.*, pp. 194—200. Crenshaw, *op. cit.*, pp. 199—200.
- (27) Schulz, *op. cit.*, p. 202. Cauthen, "Secession And", p. 25.
- (28) Schulz, *op. cit.*, pp. 202—03. Crenshaw, *op. cit.*, p. 200, p. 300. Cauthen, "Secession And", p. 25. Dunmond, *op. cit.*, chap. II.
- (29) Crenshaw, *op. cit.*, pp. 301—02. 註釋「新選集」上巻、參照。
- (30) Crenshaw, *op. cit.*, p. 200.
- (31) Schulz, *op. cit.*, p. 203.
- (32) Crenshaw, *op. cit.*, pp. 201—02.
- (33) Brown, *op. cit.*, pp. 258—59.
- (34) Wallace, *op. cit.*, p. 523.
- (35) Schulz, *op. cit.*, pp. 204—05.
- (36) Crenshaw, *op. cit.*, p. 301.
- (37) Schulz, *op. cit.*, p. 203. Hesselstine and Smiley, *op. cit.*, pp. 264—65.
- (38) *Ibid.*, p. 263.
- (39) Schulz, *op. cit.*, p. 203.
- (40) Crenshaw, *op. cit.*, p. 203.
- (41) *Ibid.*, p. 203. Cf. Laura A. White, R. Barnwell

- Rhett: *Father of Secession* (1931)
- (42) Dunmond, *op. cit.*, chaps. III, IV, V.
- (43) Crenshaw, *op. cit.*, p. 204.
- (44) A. O. Craven, "Why The Southern States Seceded?" in G. H. Knoles ed., *The Crisis of The Union*, p.64.
- (45) Crenshaw, *op. cit.*, pp. 203—04.
- (46) *Ibid.*, p. 211, p. 302.
- (47) *Ibid.*, p. 211.
- (48) *Ibid.*, p. 212.
- (49) *Ibid.*, p. 266.
- (50) ウィ・H・ホムンズ、ヘンリー・ロマンチャー共著『新選集』二四九頁、參照。
- (51) Schulz, *op. cit.*, p. 216.
- (52) *Ibid.*, p. 302
- (53) トレン・ホムンズの著述、新選集の上巻、參照。
- (54) Phillips, *op. cit.*, p. 159.
- (55) Brown, *op. cit.*, p. 262.

	フリッキンリッチ (%)	ネル (%)	ダグラス (%)
ジョージア	51,889 (48.77)	42,886 (40.34)	11,590 (10.89)
フロリダ	8,543 (59.54)	5,437 (37.90)	377 (2.55)
アラバマ	48,831 (54.04)	27,875 (30.85)	13,651 (15.11)
ミシシッピ	40,797 (59.02)	25,040 (36.23)	3,283 (4.75)
ルイジアナ	22,681 (44.90)	20,204 (40.01)	7,625 (15.09)
テキサス	28,732 (53.15)	20,094 (37.17)	5,227 (9.67)
サウスカロライナ	47,548 (75.49)	15,438 (24.51)	ベルと合流

サウスカロライナ州議会によって選挙人を選出



#### 四 サウスカロライナの分離決定

サウスカロライナにおいて大統領選挙はなかつた、といわれるようにブリッキンリッジの当選の可能性は殆んど期待されていなかった。ペンシルヴェニアとインディアナにおける州選挙の行なわれた。○月九日以降指導者の殆んどはリンカンの当選を確信するにいたつた。<sup>(1)</sup>

指導者たちは何らかの反抗に賛成し、多くは南部盟邦の形成をすすめた。ケイト、マイルズ、ボイスおよびギストらは「もし必要あらば万難を排しても一刻もすみやかに分離するように促した。彼らは引延しやちゆうちよによつて分離感情を冷却させ、保守反動の時を与えることを恐れていた。I・W・ヘインは「もしもその場合サウスカロライナが行動しないならば、真剣なものたちの意気は完全にくじかれよう。私は一般民衆の決意が頓坐してしまふのを恐れる。」と書いた。<sup>(5)</sup> 今や大会運動を指導してきたオアアらのナショナル・デモクラットも分離に言質を与えた。<sup>(6)</sup> これに対して、B・F・ペリイはリンカン当選が合法なものにして、かつ奴隷制度に対する直接的脅威でないことを論じ、アポリシヨニズムに反対したリンカンの態度を指摘し、共和党政府に従うよう助言した。<sup>(7)</sup> 著名なユニオニストのJ・L・ペティグラーはリンカン当選を叛逆の理由として支持できないとのべ、さらに革命を起すにはあまりにも繁榮しているために分離はないであろう、と樂觀的な言葉をならべた。<sup>(8)</sup> ペリイは分離反対の勢力糾合を企てたが、州内刊行物の強烈な反対をうけ

た。ユニオニストは公然と分離反対を叫ぶことをためらい、少数の匿名筆者が若干の新聞で分離に反対したにすぎない。<sup>(9)</sup>

外見上州は分離に結束したかのようにはみえたが、分離の充分な条件は整つていなかった。州政治に大きな発言力をもつ上院議員のハモンドとチエスナットが何ら明確な言質を与えていなかった。それは分離強行派の不満でもあり、不安でもあった。ケイトとヘインはハモンドに態度表明をせまり、再選の危いことをほのめかした。これに対してハモンドは九月二十五日付のチャールストン・コリアー紙において、リンカンの当選はユニオンを危険にするが、尚ブリッキンリッジの当選の可能性を指摘し、個人的には湾岸諸州の保証のあるときには分離に賛成するとの控え目な返答を与えた。<sup>(10)</sup> チエスナットもまた態度をほかし、サウスカロライナが他の諸州を分離に引きずり込むというヴァージニアの提案には冷淡であつた。<sup>(11)</sup>

しかし分離に重要なことは、彼らの態度よりも分離方式をめぐる見解の相違であつた。前述したようにヴァージニアの拒絶によつて協同分離は断念されていた。一般には個別的州分離の方式が考えられていた。しかし、サウスカロライナが分離の先鞭をつけるべきか否かをめぐつて見解は大きく分かれた。分離に賛成しながらも人々の多くはサウスカロライナの単独分離に反対した。マイルズはサウスカロライナの即時分離を主張した。ケイトとボイスは先鞭をつけることに反対しなかつたが、他の南部諸州の参加を望んでいた。ハモンドとチエスナットは先鞭をつけた場合の結果を懸念した。一方、オアアは先鞭をつける

ことに疑問をなげかけ、アッバマ、ミンシッピおよびジョージヤとの協同分離をのべた。<sup>(12)</sup> そこで、分離をめぐる党派的分裂とそれに伴う分離の失敗の可能性をみてとつたレットは極めて慎重な発言をなすようになった。マキキリー紙は単独分離の煽動を抑制した。<sup>(13)</sup>

一〇月の州議会選挙は分離方式を争点として争われたが、一月五日に召集された特別議会で、実際にはすべての人々が望み、かつ多くの人々が分離行動の条件としていた他の南部諸州の支持を獲得する最良の方法をめぐつて深刻な見解の相違が存在した。南部の会議による分離に賛成するものはごく少数にすぎなかつた。協同主義者ですら、ある種の保障をつけた個別的行動を考えていた。サウスカロライナについての不信はもはや存在しないとみる人々は即時単独行動が協同をうる最も確実な方法であると考えた。これに対して、特派派遣などの慎重論の背景には一八三二年と一八五一年の教訓があり、性急な行動が他州に不信をいだかせ分離を失敗させるとみる人々は先鞭をつけることに反対した。州議会開会の前夜、他の州が先鞭をつける望みが断たれるまでは協同分離にさえ先鞭をつけるべきではないという強い意向の存在したことが観察されている。<sup>(14)</sup>

分離強行派は、サウスカロライナが先鞭をとるべきか否かの決断に先立つて情勢分析を行つた。すでに一〇月五日ギスト知事は棉花諸州の知事に手紙をしたため、分離に対する意向を打診していた。これらの一州とても、分離の先鞭をつける兆しをみせなかつた。ミンシッピ、アラバマ、フロリダの知事は一州

ないし諸州の先行に従う旨を回答した。ノースカロライナとルイジアナは分離諸州に対する連邦の強圧を許さないというものであつた。ジョージヤの知事は、州は越権行為を持つてであらうが、他の州の行動によつて大きく影響されるだらうとつけ加えた。諸州の活動家はサウスカロライナが先鞭をつけるよう激励する多数の手紙を送つた。<sup>(15)</sup>

このような資料の分析の結果、ギスト知事ら分離強行派が先鞭をつけることを決意したことは疑いない。オルドリッチは、「我々は動きをつくり、その動きに(民衆を)従うようにさせなければならぬ。それはすべての革命、すべての運動のやり方なのである。」とのべたが、協同確保の方法として、いやが応でも分離の流れの中に諸州をのみ込んでいくために先鞭をつける強行の決意が示されている。ギスト知事は一月五日州議会に所信を表明し、大統領選挙人選出後も会期を開いたまま選挙結果を待ちうけ、分離会議を召集するよう勧告した。再度コロンビア地区で煽動がなされ、千人以上の市民が著名人に分離をせまつた。この結果、ハモンドを除きチエスナットやボンハンらサウスカロライナの議会代表はすべて分離に賛成するに至つた。<sup>(17)</sup>

リンカン当選のニュースが伝えられるや、分離提案が一斉になされた。R・B・レットは州下院に、E・レットは州上院に分離会議への選挙日を一月二日、開会日を二月一七日とする法案を提出した。H・バイストは一月八日と二月一五日とする法案を下院に提出した。G・A・トレンホルンとH・D・レ

ゼンとは日取未定で他州の協力の保証があるまで引延ばす法案を各々下院と上院に提出した。ジョージヤへの特使選出後の一月一九日まで州議會を延期し軍事財政合同委員会がその間に防衛立法を準備することを決議したトレンホルンの提案はもつとも保守的提案とみられたが、彼は決してユニオニストではなく、ジョージヤの支持を切望していた真の協同主義者であった。議員間の調和と他州の協同の手續を尊重する幹部会は慎重審議の末、一月八日と一五日を選んだ。<sup>(18)</sup>

この間一月七日には連邦判事のA・G・マグラスの辞職が伝えられたが、その辞職が州議會を即時行動に結束させる狙いをもつものであったと評されたように、チャールストンやロビンピアにおいて大きな興奮をつくり出し、州議會の行動に大きな影響を及ぼさないうちはなかつた。ウォレスによれば、彼の辞職は分裂していたチャールストンの議會代表を即時行動に統一させることになった。マックカーター・ジャーナル紙は、「このニュースが受取られた瞬間からすべてのためらいは終わった」と書いた。<sup>(19)</sup>

ほぼ時を同じくして、ジョージヤにおいて分離感情がたかまりつつあることを示すニュースが届いた。チャールストン・コリアン紙はジョージヤのブラウン知事が州議會に宛てた教書において即時會議の開催を勧告する箇条を加える旨をギスト知事に書き送ったと報じた。<sup>(20)</sup>

そこでトレンホルンは九日下院にジョージヤへの特使派遣を取り下げる修正案を提出した。この修正案は幹部会の決めた一

州議會に対する外部の圧力が加えられた。コロンビアにおいてミニット・メンは引延しを許さない声明を出し、早急な會議を要求する決議をした。サヴァンナ市民が同市とチャールストンをつなぐ鉄道の完成を祝うべくチャールストンに到着したが、当地でジョージヤのニュースに接するや、熱狂的な興奮が生れた。ミルス・ハウスとインステイチェート・ホールにおいて大集会は花々しい分離大会に転じ、ジョージヤの弁士が加わって煽動的演説を行い、協力を約束した。

この集会はのちにマキユリー紙によって全分離運動の転換点と評されたが、州議會に深刻な影響を及ぼし、上院の法案を變更しないで報告しようとしていた州下院の委員会は一月八日と一五日に代えて二月六日と一七日に修正して報告した。A・W・トンブソンら少数の反対はあった。しかしオルドリッチは日取繰上げの説明を行い、ジョージヤの立場とチームズズの辞任は州の危惧を一掃せしめるものであるとのべ、J・カニンガムもまたこれを支持した。全体委員会は九一対一四で提案を承認し、下院は一一七対〇で、上院もまた四二対〇で通過成立せしめた。時に一月二日であった。<sup>(21)</sup> サウスカロライナの分離會議に先立つこと三日、二月一日に奴隸州出身の三〇名<sup>(26)</sup>の代議士がワシントンで会合し、「われら選挙民に告ぐ」メッセージを送り、「我々は南部人民の名誉、安全および独立には、南部盟邦の組織が必要であると考える。それは個々の州分離によつてのみ達成される」と南部人の個別的州分離の決断を促した。二月一七日に開かれたサウスカロライナの分離會議は全

月一日を分離會議の開会日としたが、個別行動主義者にとつて、いかなる協同の政策も納得できなかった。エッジフィールドのM・W・ガレイは、トレンホルンの決議案はスビーディーな分離をくじき、運動全体に冷水をかけるものであると批判した。<sup>(22)</sup>

しかしアップカントツリにおいて分離を諒いてきたかつてのナショナル・デモクラットのS・マックゴードンはトレンホルンを支持し、協同は州が長くもとめてきた政策であるし、成功が見込まれる現在でも捨てられてはならないと主張した。<sup>(23)</sup>

州下院はこれ以上の論議をうち切った。レゼンは上院において彼の決議案について発言し、分離するよりも、分離の前に他州の協同をもとめ、後続の保証をうることの賢明さを指摘した。しかし結局トレンホルンの下院提案を修正したB・H・ウィルソンの決議案が上程され四四対一で第二議會を通過し、下院に送られた。一月の會議を州上院が採択したということは、指導者が分裂を懸念して慎重を期していたことを示すに充分である。<sup>(24)</sup>

法案通過直後、州議會に分離を促進させる衝動的なニュースがジョージヤから入った。それによると、ジョージヤにおいて會議を要請したブラウン知事の勧告が熱狂的に支持されたこと、そしてサヴァンナとミレッジヴィルの連邦官吏はすでに辞任していたこと、さらにジョージヤの行動を早めたのは上院議員R・チームズズの辞任であったことが明らかになった。このニュースはサウスカロライナの州議會の多くの議員に會議の日取り繰上げの必要を確信せしめることになった。

員一致で分離条令を可決し、全分離運動の先鞭をつけたのである。<sup>(27)</sup>

キプラーは一八六〇年のサウスカロライナにおけるユニオニスト勢力の分離決行にいたるまでの執拗かつ積極的な活動に注目したが、ハモンドを除き、オコンナー、オア、ペリー、ステイグルー、レムエル、ボーザーそしてシムキンズらユニオニストないし協同主義者はいずれも官職を保有していないか、重要官職保有者ではないのであって、タレンショウが指摘するように、分離強行派のギスト知事、代議士のマイルズ、ボンハン、ボイス、マックイン、ケイトそしてアッシュモアらはまさしく州政治の中樞を構成していた。彼らはレットらの煽動活動に支援され、協同主義者勢力を糾合しつつ分離を決行したのである。<sup>(28)</sup>

註(1) Schultz, *op. cit.*, pp. 219—20.

(2) *Ibid.*, p. 200.

(3) W. A. Kibler, "Union Sentiment in South Carolina in 1860." *The Journal of Southern History* Vol. IV (1938), p. 352.

(4) Cauthen, *South Carolina's Decision To Lead The Secession Movement*, p. 360. 以下 "S. C.'s Decision" と略す。

(5) Crenshaw, *op. cit.*, p. 213.

(6) Schultz, *op. cit.*, p. 200.

(7) Cauthen, "S. C.'s Decision" pp. 360—61. Crenshaw,

- 4p. cit., pp. 220—21.
- (8) *Ibid.*, p. 222.
- (9) Cautien, "S. C's Decision," p. 361.
- (10) *Ibid.*, pp. 361—62.
- (11) *Ibid.*, p. 362.
- (12) *Ibid.*, p. 362. Schulz, *op. cit.*, pp. 222—23.
- (13) Cautien, "S. C's Decision," p. 362.
- (14) *Ibid.*, pp. 363—64. Schulz, *op. cit.*, pp. 222—23.
- (15) Cautien, "S. C's Decision," pp. 364—65.
- (16) Wallace, *op. cit.*, p. 525.
- (17) Cautien, "S. C's Decision," p. 365.
- (18) *Ibid.*, pp. 366—68.
- (19) *Ibid.*, p. 368. Schulz, *op. cit.*, p. 357. Wallace, *op. cit.*, p. 525.
- (20) Cautien, "S. C's Decision," p. 368.
- (21) *Ibid.*, p. 368.
- (22) *Ibid.*, p. 368.
- (23) *Ibid.*, p. 369.
- (24) *Ibid.*, pp. 369—71. Kibler, *op. cit.*, p. 357.
- (25) Cautien, "S. C's Decision," pp. 371—72.
- (26) Brown, *op. cit.*, p. 267.
- (27) Wallace, *op. cit.*, p. 526.
- (28) Crenshaw, *op. cit.*, p. 198.

尚、この章については山岸義夫「サウスカロライナにおける

分離運動の展開」(群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編 第一七巻 第七号)というすぐれた研究がある。

五 ロウア・サウスの分離会議

サウスカロライナの分離会議が開かれるや、協同を約束するためにミシシッピとアラバマの特使が出席し、フロリダの M・S・ペリー知事やジョージアの H・コップもまた会議の進行を見守った。ロウア・サウス諸州の分離決行のシグナルはあがった。しかし連邦議会を中心に和解・調停の努力がなされていた。妥協工作の成否は下院に設けられた三十二人委員会と上院の十三人委員会にかかっていた。だが、その任務に不適な委員会の構成メンバーのため、また委員会が双方から不信の眼で見られたため南北の主張を汲んだクリッランデン妥協案すらついに葬られ、一二月末には調停が打切られた。以後、共和党の譲歩を期待していた南部人の多くは急速に分離主義者に転じた。

これより三週間間に分離運動を通じて他のいかなる時期よりも重要な事態がめまぐるしく生じた。ジョージヤ、ルイジアナおよびテキサスでは分離会議の選挙が行なわれた。フロリダ、アラバマおよびミシシッピでは会議が開かれた。連邦軍隊の三つの重要な移転がなされた。加えてブカナン政府の軍政は分離運動を促進し、両ヤクシジョンの過激分子を強めた。一月二日のジョージヤの分離会議の代表者選挙における分離派の大多数の選出は、ダモンドによれば、湾岸諸州の分離と南部盟邦の形成にかかわるいかなる疑念も取除いた。

ロウア・サウス諸州の個別的州行動にもっとも大きな影響力を与えたのは六〇年二月四日と六一年一月五日の南部代議士の幹事会であったといわれる。デヴィスは一月五日、南部諸州がユニオンから絆をたち切って新しい盟邦をつくることを再び勧告する共同決議に加わった。決議文はその一部で、諸州はそれぞれ、できうる限り早くユニオンから分離すべきであるとのべた。

州間の不一致を調整し、統一ある行動を保証したのは特使であった。ミシシッピへは取引関係のもっとも緊密なアラバマの特使 E・W・ベッタスが派遣された。ルイジアナに対してはミシシッピの特使 W・アダムズが派遣された。彼らは自州の分離を保証し、他州とともにいち早く南部盟邦の形成に参加する旨の言質を与えて、疑念を除去して迅速な分離に活躍した。かくして一月九日にミシシッピが分離を決行したのに続いて、ロウア・サウスの残余の州がユニオンを去った。

通説に挑戦して真に民衆の一般的運動とみる見解を真向から否定したポッターの立論に対して、ウイスターは前掲論文において、次の四つに争点を絞って、ロウア・サウスの個別研究の成果を援用し、論破を試みている。

(一) 一月の大統領選挙の投票総数にくらべ、分離会議の代表者選挙に参加した人数の著しい減少。

ウイスターは投票数の減少を単に個別的州分離に対する反対として理解することに反論し、一八六〇〜六一年の多くの南部人にとって分離は分離会議の代表者選挙の前でさえ既成事実で

ロウア・サウスの分離会議

州	代表者の選挙	会議開催日	分離条約の通過	今日
アラバマ	1860.12.24	1861.1.7	1861.1.11	
サウスカロライナ	1860.12.6	1860.12.17	1860.12.20	
ジョージヤ	1861.1.2	1861.1.16	1861.1.19	
フロリダ	1860.12.18	1861.1.3	1861.1.10	
ミシシッピ	1860.12.20	1861.1.7	1861.1.9	
テキサス	1860.12.3	1861.1.8	1861.2.1	
ルイジアナ	1860.12.11	1861.1.7	1861.2.25	

あったが故に、彼らの若干のものが既成事実に加わるのに思わずらうところがなかったと主張している。彼はアラバマについてのデンマンの研究から、州内の一八郡は投票総数九〇%以上の票の支持によって選出が認められたこと、またそれらの郡の殆んどにおける票が大統領選挙において投ぜられた票にくらべ極めて少なかったことから、人々のかたりの数が結果を確信していたが故に棄権したと推断できる、とのべている。さ

らにウスターはジョージヤ、サウスカロライナおよびミシッピにおける多くの郡は個別州分離の候補者に対立候補者がなかったこと、また有権者が無理矢理に投票させられることがなかったことから投票数が少なかったと説明している。結論として彼は、棄権者をすべて反分離主義とみることが過度の単純化である(9)と強調する。

筆者は、まず分離会議への代表の選出方法からみる必要があると思う。ミシッピ、アラバマおよびテキサスにおいては形式上民主的選挙制度が存在したが、サウスカロライナでは財産資格制限、ジョージヤでは五分の三条件の適用、またルイジアナでは奴隷が票として算入されるという不均等な選挙制度が存在した(10)。それらはホワイト・カウンツリに対するブラック・

大統領選挙の投票総数	69,020
分離会議の代表者選挙の投票数	41,656
内訳	
南部の協同	12,218
個別州分離	16,874
連立候補	8,620
立場不明者	1,882
資料欠失	2,062

カウンツリに過度の優越を保証した。同時にブラック・カウンツリにおける分離主義が有利に展開できる条件をつくっていた。次に投票率を大統領選挙とくらべてみよう。上表にみる如く、ミシッピでは約六〇%、アラバマおよびルイジアナで約四分の三、サウスカ

ロライナですらかなりの棄権が指摘されている。しかもミシッピの場合、棄権率の高いのはヨーマンの拠点であるアップカウンツリとバインバールンであり、奴隷制度の顕著な発展をみたデルタ・レスにおいて低いものであった(11)。このことは分離に対する批判がいよいよ稀薄にしか反映されていないことを物語る。高い棄権率を、ウスターの主張するように、分離が既成事実として承認されていたことによるものと理解すべきであろうか。

イトンは、サウスカロライナにおける棄権者のあるものは、「屈従者」という烙印をおされることを恐れたためであると述べているが、分離強行派による煽動的・脅迫的な活動によって反分離の意志表示ができない状況がつけられていたことは否めない。実際、一八六〇年一月二三日および二四日付のナチエズ・フリー・トレーダー紙は、分離派に反対する人々をミシッピと南部に対する公然たる敵とよび、さらにこのような人々は味方のなかの裏切者で革命中のトリーのようにまもなく見られ、扱われよう、と威嚇した(12)。これより先、一月二日付のウッドヴィル・リベリカン紙は、なおもユニオンに味方する少数派がみられるが、南部諸権利という大問題に無関心だったり、反対するような人々は自分達の兄弟と戦わねばならないとまでのべた(13)。これら出版物による圧力に加え、ミシッピではミニネット・メンの組織が始んどすべての郡につくられ、老いも若きも加入した。また即時分離に賛成し、帰順しない印として「青色の花形帽章」をつける運動が同様に拡大した(14)。この

ような事実をみると、ウスターの主張もまた一面的理解にとどまるものといわなければならない。

(一) 立候補および選挙運動期間の短縮(15)

ウスターはゴッターが一八六〇一六一年の冬から春にかけての危急な状況を考慮していない点を指摘し、南部がいかなる条件のもとでユニオンに留まるべきか、それとも即刻分離すべきかという問題はリンカンの大統領就任前になされなければならぬ決定であった、とのべている。彼によれば、若干の南部人は新政府の越権行為を恐れていたといえ、多くのものは南部を分裂させ、非奴隷所有者を奴隷所有者に対決させる運動をもっとも恐れていた。保守的南部人でさえリンカン就任前に何らかの政策に見解を一致させる必要性を認めていた。さらにロウア・サウス諸州は以前からリンカンの当選に際し会議を召集すると警告しており、会議への代表者選挙に四―五週間が宛てられても、既に長期間議論されてきている問題であるが故に、不当にせきたてられたという非難は正当なものではない(16)。

しかし、分離強行派が革命を助長する迅速な手段に賛成し、リンカン当選に向けられた人々の反動的感情を利用しようとしたことは事実である。一月一日付のミシッピアン紙は「引延ばすことには危険がある」とのべ、リンカン当選に対する救済策としての州の即時分離を主張し、「今や行動すべき時が来た」と訴えた(17)。ミシッピアン、リヴァイル、ウッドヴィル・リベリカン、ヴィックスバーグ・サン、ナチエズ・フリー・トレーダーと二流どころの分離新聞は、延期をすすめたり、

分離の大義に同調しない人々に非難の言葉を浴びせた(18)。性急な会議が反分離勢力の効果的な闘いを阻止したことは否定できないのである(19)。

(二) サウスカロライナ、ミシッピおよびテキサスを除くすべての分離会議における強力な分離反対の存在

ウスターはこの線にそった議論の主要な誤りは棉花諸州の会議における組織された反対が有力なユニオニストによるものであったという仮定にあるとのべ、この仮定は多くの場合誤りであると断じている。彼によれば、分離に反対したものが僅か八名だったテキサスの例外を除いて、ロウア・サウスにおける個別州分離に対する反対は主に「協同」の原則に集中していた。またミシッピとルイジアナの二州において協同主義者の大多数は脱退の必要性を否定していたのではなく、時と方法をめぐって個別州分離主義者と同調しなかった真の分離主義者であった。フロリダでは協同主義者はいくつかのグループに分かれ、いかなる形の分離にも反対したのは少数であった。アラバマとジョージヤにおいてさえ、協同主義者の多くは実際には分離主義者であった。ウスターは分離会議における「条件付ユニオニスト」の大多数は「帰順主義者」ではなく、またたとえすべての条件付ユニオニストをいかなる時でも分離に反対するものであると仮定しても、その勢力は僅かなものであった、と評価している(20)。

そこで、まずアラバマの分離会議からみよう。分離主義者は二九郡を、協同主義者は二三郡を各々獲得したが、サザン・ア

ドウァター紙は、もしも二郡で投票の管理がよければ、協同主義者が多数を占めたであろう、と主張したように両勢力は伯仲していた。しかしアラバマへの特使指名のニュースや州内の連邦要務を無抵抗のうちに占領したことは、即時分離の機運を助長し、ヤンシーが会議の議長に選出されるや、急進的プログラムが作りひるげられた。それにもかかわらず、協同主義者は南部会議の提案によって引延ばしをはかり、レフレンドラムをもとめて抵抗した。分離条令は六一対三九票で可決されたものの、ホジソフによれば、会議での全真投票が必要とされていたなら、条令は通過していなかったにちがいない、と言われる程強力な反対勢力が存在していた。二三名は署名すら拒んだのである。

ジョージヤにおいても協同主義者は投票数の約四二%を獲得し、会議では個別州分離に反対して全奴隷州会議をもとめる代案を提出し、一六四対一三三票という少差で破れたように伯仲した勢力を示した。ジョージヤの真の分離を決定したのはJ・E・ブラウン知事と民主党の機構を支配した彼の配下によるものとみられている。<sup>(26)</sup>

ルイジアナではウィック勢力を構成した商人や砂糖プランターの間にはユニオニズムが強く、穏健なJ・スライデルは州内で大きな勢力をもちブカナン政府と親密な関係にあった。選挙は一月七日ようやく行なわれたが、連邦議会における共和党の態度が明確な憲法修正の望みを断ち、南部諸要塞への増援軍の派遣に伴うチャールストン港での事件は危機感をたかめ、フロリダ、ジョージヤ、アラバマおよびミシシッピにおける分離主義

未満で、ブランティンとは異質の農業地域をなしていた。<sup>(25)</sup>

これらの郡が戦争中南部盟邦からの独立を企てたように、徹底した反分離の立場をとった。<sup>(35)</sup>

ミシシッピの代表者選挙に際し、三四郡で南部の協同対個別州分離が争点となったが、南部の協同という言葉は決して統一的に理解されていたわけではなく、リンカン当選というただそれだけを分離の口実とすることに反対し、各州の個別分離によって南部を革命に追い込むことを拒む点で軌を一にしていた。<sup>(36)</sup>

ジョンソン判事らは、個別の州による分離の権利の是認は、合衆国憲法を効力も統合力もない、"poor of stand"にするのと比べ、分離を革命と見なし、個別分離を"帰順"であり、"権利"の放棄であり、偽善的かつ臆病な行為として非難し、南部の協同の目的は合衆国憲法にある南部の権利を守るためであると主張した。彼は、もしユニオンにおける平等性をうるために革命に訴えることが南部にとって必要になった時は、全奴隷所有州の協同が最良であると信じていた。<sup>(37)</sup>

分離会議において、J・L・オルコロン、J・S・イェルガー、W・ブルック、T・A・マーシャル、G・R・クレイトン、F・M・ウォルターそしてC・D・フォンテインらはウィック勢力を代表したが、彼らはラーマーの提案した分離法案に対して代案や修正案を提出した。票決で破れたイェルガーの代案は、連邦政府とユニオンの他の州との関係を考慮するために二月一日ケンタッキーのレキシントンに奴隷州の会議をひらき、連邦憲法の修正や奴隷州の保護のための方策をうちだし、それが

者の勝利は南部盟邦の組織に十分な保証となつたため、分離主義者に有利となつた。<sup>(27)</sup> それにしても、投票数は二〇、四四八対一七、二九六と接戦の跡を示している。しかも大統領選挙とくらべてみると、二二、七六六票も少なく、真に民衆の過半数を制したとは言えないのである。<sup>(28)</sup>

それではミシシッピの場合はどうであつたらうか。大きな乗権に加え、協同主義者の得票が意外に多いものであつた。協同主義者の得票が個別州分離主義者のそれを上廻つた一四郡をみると、分離に対する批判が二つのグループに大別される。第一のグループはミシシッピ川に沿うデルタ地方の一郡である。ここは奴隷人口が総人口の五〇%以上を占めた奴隷密集地であり、奴隷所有の平均規模においても一郡中七郡は一五人以上であつた。<sup>(30)</sup> これらの郡はまた棉花生産においても一方表を越える産額を誇つていた。<sup>(31)</sup> 州内随の大プランター地域でかつてウィックが支配したこの地域は大統領選挙においてベルを支持していた。<sup>(32)</sup> 彼らは不用意な煽動に反対し、分離に否定的な立場をとつたのである。一月八日付のウィックスバーク・ウィック紙はリンカン当選を機に提案された"反抗"のプログラムについて反対の態度を表明し、"反抗は叛乱であり、分離は叛逆である"とのべた。同紙はさらに分離ないし革命の結果は闘争、衝突、流血そして戦争であると訴え、分離は"盲目的かつ自殺的コース"であると警告した。<sup>(33)</sup> 第二のグループはテイシヨミンゴ、カルフィンおよびジョーンズの三郡である。ここでは奴隷人口が総人口の三〇%にも達せず、奴隷所有の平均規模も五人

非奴隷州によつてうけられない場合は上記会議を再会し、別の連邦を組織することを宣言するものであつた。<sup>(38)</sup>

分離法案は一月九日八四対一五票で成立したが、ウッズの指摘する如く、個別の州行動を引延ばそうとした人々も多くは賛成投票した。その理由は何か。議論から行動への転機にたつて、階級や党派心をこえた州への忠節が異論を克服したのである。オルコロンは次のようにのべた。

"議長、私はこの大紛争の解決について、他のコースがとられるべきだと考えてきました。そしてその目的のために努力し、主張を重ねてきました。しかしサイコロは投げられたので、州へルビコン川を渡つたのです——<sup>(39)</sup> したがって私は軍隊に加わつてローマに進軍する。私は法案に賛成する。"

ウイスターは協同主義者を結果論的にみているのであつて、州への忠節が叛逆かの二者択一に直面して、ユニオンを選ぶものは例外的であらう。

(四) テキサスを除いて分離会議の決定事項を民衆のレフレンドラムに附さなかつた。

この問題について、ウイスターは代表者が時間の浪費としてばかりでなく、全く不必要であるとみていた事実によつて説明されるとのべている。彼はさらに代表者が教週間前に民衆によつて選出されたばかりである故に民衆の意向をつかんでいたら主張し、ランドールの指摘する如く、レフレンドラムは分離に関する不可欠の手順ではなく、分離は選挙による会議の手續きによつてなされるべきものであつた、と付言している。<sup>(40)</sup>

アラバマ、フロリダおよびミシシッピにおけるリンデンダムの提案は却下されたが、代表者選挙における高い棄権率を考慮すれば、民意を再確認する根拠は存在していた。そして、アラバマの如く個別州分離と協同主義勢力が伯仲しては、尚ほ、必要な手順であったといふべきである。アラバマの会議で分離条令に署名を拒んだ三三名の第一の理由は、リンデンダムに付与されたことである<sup>(41)</sup>。

当時の事情を詳細に記録したフォーカーソン文書は、分離諸州における有権者の大部分がユニオンから分れることと激しく反対したこと、また、リンデンダムが行なわれたならば、おそらく大多数のものは境界諸州の協同なしたは分離に反対したこととは間違いないと述べている<sup>(42)</sup>と記している。

- (註一) Hesseline and Smiley, *op. cit.*, p. 272. Craven, *The Growth of Southern Nationalism*, p. 363. 以下
- (2) Dummond, *op. cit.*, chap. VIII.
- (3) *Ibid.*, chap. IX.
- (4) Brown, *op. cit.*, p. 267.
- (5) Dummond, *op. cit.*, chap. X.
- (6) *Ibid.*, p. 148-49.
- (7) 二章の註(一)参照
- (8) Potter, *op. cit.*, p. 214.
- (9) Wooster, *op. cit.*, p. 124.
- (10) Eaton, "The Old South," p. 319.
- (11) Rainwater, *op. cit.*, p. 220 46 作中。

- (23) Rainwater, *op. cit.*, p. 164.
- (24) *Ibid.*, p. 198, 206.
- (25) Eaton, "Old South," pp. 458—59. Heard, *op. cit.*, p. 44.
- (26) Rainwater, *op. cit.*, p. 179.
- (27) *Ibid.*, p. 166.
- (28) Thomas H. Woods, *A Sketch of The Mississippi Secession Convention of 1861—Its Membership and Work. Publications of the Mississippi Historical Society*. Vol. VI (1902). pp. 91—101.
- (29) *Ibid.*, p. 96.
- (30) Wooster, *op. cit.*, p. 126.
- (31) Dummond, *op. cit.*, p. 205.
- (32) Excerpts from Fulkerson's "Recollections of The War Between States." *Mississippi Valley Historical Review*. Vol. 24. (1937—38). p. 351.

六 あとがき

サウスカロライナを中心とする少数の強行派による運動として出発した分離運動は、一八五六年の大統領選挙を契機として再燃し、分離は南部政治指導層の掌握せるものとなった。翌五七年の恐慌は、ドレッド・スコット判決と相俟って南北デモクラットの対立を顕在化した。奴隸制度をめぐる民主党の内部相剋は、共和党の攻勢の前にフリーポート・ドクトリンをめぐる

- (12) Eaton, "The Old South," p. 590.
- (13) Rainwater, *op. cit.*, pp. 198—99.
- (14) Eaton, "The Old South," p. 583.
- (15) Rainwater, *op. cit.*, p. 172.
- (16) *Ibid.*, p. 172.
- (17) *Ibid.*, p. 172—73.
- (18) Wooster, *op. cit.*, p. 124.
- (19) *Ibid.*, pp. 124—25.
- (20) Eaton, *The Old South*, p. 584.
- (21) Rainwater, *op. cit.*, p. 163.
- (22) *Ibid.*, p. 172.
- (23) Hesseline and Smiley, *op. cit.*, p. 273.
- (24) Wooster, *op. cit.*, pp. 125—26.
- (25) Craven, "The Growth," pp. 365—68. Eaton, "Old South," pp. 586—87. Dummond, *op. cit.*, pp. 201—05.
- (26) Craven, "The Growth," pp. 369—73. Dummond, *op. cit.*, pp. 193—95.
- (27) *Ibid.*, pp. 208—09. Craven, "The Growth," pp. 373—75.
- (28) Eaton, "Old South," p. 590.
- (29) Rainwater, *op. cit.*, p. 198.
- (30) *Ibid.*, p. 206.
- (31) *Ibid.*, p. 94.
- (32) Cf. W. D. Burnham, *Presidential Ballots*.

決定的な決裂を惹起し、南部政治指導層をして民主党によるユニオンの支配と奴隸制度の擁護を断念せしめ、分離・盟邦形成を志向させることになった。彼らはリンカン当選を予見し、ブリッキンリッチのもとに南部の結束をはかり分離決行に際しても、奴隸州の内部統一に腐心したのである。指導層の蹶起はかなりの民衆を分離にたも上らせた。それにもかかわらず、五〇年代後半の准州における奴隸制をめぐる南北対立の激化のなかで、出版物を通じて民衆を煽動し、衝撃的事件によって行動に踏切らせるための謀略をたて、チャーマン選出の策謀をめぐるし、アラバマ綱領やデヴィス決議案によって、南部の結束を企て、民主党の破壊を工作し、リンカン当選の途をひらき、ミニット・メン等の組織によって民衆を分離に駆りたて、奴隸叛乱の陰謀をめぐるして民衆の恐怖心を煽り、指導層の分離決行に寄与した分離強行派の役割は無視できないのである。

サウスカロライナは単独州分離によって、分離の先鞭をつけたが、それは南部諸州を分離に引き入れるための戦略をなすものであった。分離指導者は州間をとりもつ特使派遣によって調整をはかり、迅速な行動によって、反分離勢力の効果的反撃と民衆の分離感情の冷却を封じ、数週間のうちに分離を完了し、盟邦の形成に成功した。

ウイスターの主張は、有権者が既に分離を認めているという分離主義者の認識にたつ発想からなされていることは明らかである。ロウア・サウスの分離会議の分析は分離が決して一体化せる南部の運動でなかったことを立証しているのである。それ

故、モッターの主張は決して論破されてはいないのである。スナラズ、陰謀的要素と指導層による強行を看過してはならぬ。

これでは分離運動を展開せしめた地盤は何であったか。

イトンはサウスカロライナが経済的な理由から、殊に奴隷制度の擁護に大きな利害関係をもっていたところから分離運動のイニシアティブをとったのであるとのべているが、既に指摘されている如く土地の潤渥と南西部との競争によって経済的衰退の途を辿っていたばかりでなく、政治的発言力もまた大きく後退していたのである。下院議員の割当数をみると、一八二二年に九名であったのが、四二年には七名、五二年には六名にまで減じたのである。ここにサウスカロライナにおいて分離主義がいち早く定着してくる地盤があった。一八五三年州のエリート養成にあたっていたサウスカロライナ大学長のJ・H・ソルンウエルは「州の権利と連邦立法への州の充分かつ平等な影響力を維持するために州がたのみとするものは、この州の政治家の手腕と州人民の性格でなければならぬ」とのべたが、内的衰退と外的脅威を打開する唯一の途は政治的リーダーシップの掌握にかけられ、政治はプランターの使命とまでなっていたのである。その楯は、カルフーンの政治論、就中、州権論であり、その切り札は州主権の行使である分離となり、論理的に弁明したのである。

それでは、一八六〇年にサウスカロライナ、ジョージヤ、ヴァージニアおよびノースカロライナの四州に匹敵する棉花生産

証左ではなく、むしろ危機への対応を物語るものである。

ニューヨークの棉花価格は一八五七年の二三・五セントをピークとして以後、五八年には二二・五セント、五九年には二二セント、そして六〇年には一セントへ次第に低落の途を辿った。ところが恐慌はそれが与えた結果よりも、南部経済のあり方そのものについての厳しい反省を促し、経済的独立の構想をば一層徹底せしめ、政治的独立たる分離への展望をつけさせる転機となった点が注目される。J・D・B・デボアが「南部の富は永久的で真実であるが、それにひきかえ、北部のそれは一時的でふせかけにすぎない」と誇らしげにのべたにもかかわらず、恐慌はニューヨークが南部の財政処理の大きな部分の元締めとなつていくという事実さらに南部の繁栄がニューヨークにおける金融市場の状態如何にかかっているという事実をば以前よりも一層明瞭に感じとらせた。いわばそれは南部の繁栄が農業技術の改良や経営方法の改善にあるのではなく、第一義的には南部経済のあり方そのものにかかっているとの認識にたなせたのである。すなわち、棉花プランターは農業問題の解決策を政治にもとめるべきであると確信したのである。

実際、新しい農業組合は四〇年代普及にとめてきた多角化ないし自給化の目標をすてて、問題の解決を益々政治的独立に向けていったのである。一八五七年ミンシッピ州議会が設置した農業局の事務局長に就任したJ・J・ウィリアムズは五八年六月ケンパー部で演説し、その中で棉花価格を決めるものは生産者ではなく、仲介業者であることを想起させ、彼らに対して

額をあげ、第一位にたつたミンシッピが分離運動においてきわめて積極的な役割を担うようになったのは何故であろうか。

この点について我々の注目をひくのは一八五七年の恐慌の影響である。プランターは棉花価格の高値から五〇年代棉花の単一栽培に集中することによって、かえって恐慌による深刻な危機に見舞われたように思われる。こうして訪れた経営上の危機がこれまで保守的態度をとってきた南西部プランターの間には分離主義を急速に浸透せしめた。投機や銀行の信用貸付の過度の膨張や余りに急激な工場投資が原因をなしたこの金融恐慌は北西部および西部の諸州にもつとも深刻な影響を及ぼしたといわれるが、イギリスおよびニューイングランドの金融市場に依存し、その手形交換率に繁栄をかけたいたプランターにとつてまた大きな打撃であったことは言うまでもない。総生産額の八二%余りが輸出された棉花は輸出商品であり、資本の欠如に乗じて容易に中間搾取が介入できたのである。ダッドは、つまるところ南部奴隷制の利益にあずかっていたのは北部人であつて、プランターは彼らの富の保管者にすぎなかった、とのべているが、実際プランターは仲買人やファクターの規制を人なり小なりうけていたのである。しばしばプランターは次の収穫を担保に入れてファクターから八〜一二%の利率で金を借りたといわれるが、棉花価格の下落に際して苛酷な条件をつけられたことは想像に難くない。ミンシッピのドクター・ノイリップやアラバマのヒュー・デヴィスの事例にみられる如きこの頃を境として企てられた中小プランターの多角化ないし自給化は決して繁栄の

仲介業者や消費者から棉花市場の支配権を奪取するには組織が必要であるとのべた。彼は同様主旨の演説を州内各地で行い、五八年夏から秋にかけて急ぎ地方農業組合の結成を計った。次いで彼は組合組織を分離主義者の活動組織として、さらに地方民兵隊の組織に利用しようとした。五〇年代末のミンシッピの農業指導者は民主党的分離派と緊密な提携にたつ農業政治家によってとつて代られたのである。マックソイル、ベッタス知事、J・B・ヘーリング、W・P・アンダーソン、T・J・ハドソンおよびE・ブラウンという農業局の執行委員会の顔ぶれは、すべて指導的民主黨員であつた。しかも農業局は、ジェノヴェゼが指摘する如く、分離の宣伝機関と化して、分離運動の推進的役割を果たしたのである。

サウスカロライナの経済史に関するA・G・ミス・ジュニアの研究もまた州の農業組合が次第に分離主義者のクラブに転じていく傾向のあつたことを指摘している。

南部において商業上、財政上および社会上の独立を要求する運動は、自由諸州が政治上の優越性を獲得するとともに起されていた。南部に対する議会の差別立法に対する対策を協議した南部商業会議、ヨーロッパとの直接貿易に備えて生産および販売市場の統合をねらつた鉄道建設、奴隷制度の拡大と莫大な資源をもつ共和国を待望せる南方への領土拡大運動など、南部の政治的独立を指向せる動きであつた。

註(1) Eaton, "Old South", p. 584.  
(2) Schultz, op. cit., p. 3. Cantan, "Secession And Civil

War", pp. 1—2.  
 (3) Schulz, *op. cit.*, p. 4.  
 (4) *Ibid.*, pp. 1—4.  
 (5) Cf. A. O. Spain, *The Political Theory of John C. Calhoun*. (N. Y. 1951).  
 (6) 一一九万五九千九百九十九人を挙げた「インディアン」が第一世で、以後「アラバマ」、ルイジアナ、ジョージヤ、テキサス、マリーランド、ペンシルバニアの順であった。(Cf. L. Lippincott, *Economic Development of the United States*, p. 156—57.)  
 (7) Faulkner, *op. cit.*, p. 320.  
 (8) W. E. Dodd, *The Cotton Kingdom*, pp. 29—30.  
 (9) Faulkner, *op. cit.*, p. 320.  
 (10) H. Weaver, *Mississippi Farmers*, pp. 103—05.  
 (11) W. T. Jordan, *Hugh Davis and his Alabama plantation*.  
 (12) Hesselstine and Smiley, *op. cit.*, p. 255.  
 (13) H. Moore, *Agriculture in Ante-Bellum Mississippi*, p. 91. E. G. Genovese, *The Political Economy of Slavery*, p. 131.  
 (14) Moore, *op. cit.*, p. 201. 綿合は自給用と同じ役割を果たしたが、ユニオンを抑制するために用いられた。  
 (15) *Ibid.*, p. 201.  
 (16) Genovese, *op. cit.*, p. 127.

(17) Cf. A. G. Smith, Jr., *Economic Readjustment of an Old Cotton South: South Carolina, 1820—1860*.  
 (18) Cf. P. L. Rainwater, "Economic Interests of Secession: Opinions in 1850's Mississippi," *The Journal of Southern History*, Vol. 1, (1935).

本稿の作成に際して立教大学の清水博先生と大阪教育大学の山岸義夫先生の御指導をいただいたことを記し、感謝の意を表わしたい。(一九六九年九月一八日)

訂 正

本誌第二九巻第三号、遠矢徹志「幕末におけるキリスト教再伝来について」の以下の部分を次のように訂正いたしました。

頁・段・行	誤	正
16・上・4	安政七年	安政六年
20・上・14	Free Methodist Mission Board	American Baptist Missionary Union
24・上・2	青山武雄氏調査	青山武雄氏その他調査